

[課題演習概要]

生涯スポーツを目指した体育学習の実践
ー「する」「見る」「支える」視点を通してー

西村 厚哉

Atsuya NISHIMURA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
初等教科教育高度実践プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：生涯スポーツ，「する」「見る」「支える」視点，質的研究，豊かなスポーツライフ

1 研究の目的

本研究は，生涯スポーツの実現に向けた基盤を形成する過程を子どもたちの授業中の姿から質的に明らかにすることをねらいとする。そのために，運動を「する」ことだけでなく，「見る」「支える」学習機会を数多く設定しながら，生涯にわたって，スポーツには様々なかわり方ができることについて感じさせる。

2 研究の計画

M1 前期	先行研究調査
M1 後期	附属校での実践・実践を踏まえた分析
M2 前期	先行研究の分析 TA 実習校での授業実践と分析・検討
M2 後期	TA 実習校での授業実践と分析・検討

3 研究の内容

(1) 先行研究

小林 (2018) 『「する・みる・支える・知る」楽しみ方を共有できるマット運動の指導の工夫』の研究においては，豊かなスポーツライフの実現に向けて「する・みる・支える・知る」の観点を身につけさせることの重要性について考察されている。その中では，子どものスポーツへの興味・関心の違いについて配慮がなされている。また，坂田 (2019) 『「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう子供を育てる体育科学学習指導』の研究では，児童の走力・跳力の差によって「する・みる・支える・知る」の観点から走り高跳びの記録を向上させるための学習機会が確保されている。その中で「できない」が「できる」になる際に味わ

うことのできる達成感から生涯スポーツの実現を目指している。いずれの研究も生涯スポーツの実現に向けて「する・見る・支える・知る」の確保の重要性について言及されている。しかしながら，技能中心に高める研究がほとんどである。また，成果を個人で見取る内容ではなく，アンケート調査や記録の伸びを量的に検討しているものが多い。本研究では技能の向上に留まらず，運動の重要性，楽しさを味わわせる実践を通して，個人の変容を質的に捉えていく。

(2) 実践授業

単元名	小型ハードル走（走・跳の運動）
本時	4/4 時間目
実践日	11 月 9 日
学習者	x 県 s 小学校 3 年生
主眼	小型ハードルの課題練習を通して，運動を「する」「見る」「支える」の意識をもつことができる。

(3) 実践(授業分析)考察

a. 児童Kがアドバイスをされたことによる学び

人物	行動・発言 (10 時 12 分頃)
教師	「他に何か言われた人はいますか」
児童K	Kが挙手をする。 「えーと、あの一、スピードを、リズムはいいけど、スピードを上げた方がいいと言われました。」
教師	Kの発言に対して質問をする。 「なるほどー、リズムはどんな風にいいとか言われたとかある」
児童K	ペアの児童のリズムについて答える。 「全部そろっている」
教師	Kの発言をまとめたので内容について合っているか尋ねる。 「全部一定ってこと」
児童K	うん、うんと頷きながら座る。

児童Kは，これまでの授業では運動技能は高いものの仲間のアドバイスを受け入れることが難しかったり，アドバイスの口調が強くなってしまったりするという現状があった。

学級全体で「見る」「支える」学習を通して学んだことを共有している場面である。児童Kは，本時の練習の中で，ペアの児童から実際に練習をし

ている場面を見られて、アドバイスを受けた。その際児童Kは、小型ハードル走を行う上で、リズムを一定にすることを大切にしながら走った方が良いということに気づいた。この学習を行う上で、どのようなリズムで走ることができれば気持ちよく走ることができるのか考えさせながら、授業を展開した。その中で、友達の運動を見てアドバイスをするペアの児童を設定したことにより学習内容に深まりをもたせることができた。この経験から、運動を見ることがとアドバイスをすることの重要性に気づいていると推察される。

b. 児童Kがアドバイスをしたことによる学び

人物	行動・発言 (10時14分頃)
児童K	ペアの児童に対して、アドバイスをしようとするも困る。困りながらアドバイスを言う。「んー、リズムはok」
教師	Kの発言に対して質問をする。 「じゃあ、リズムの何が良かった」
児童K	最後のあそこは4やったけど、あと全部はタン・タン・タンになって1.2.3のリズムになった。 1.2.3.2.2.3のリズム」
教師	Kの発言に対して納得する。 「うん、最後は4やったね」
K・ペア	頷きながら、話を最後まで聞いていた。

児童Kがアドバイスをペアの児童に対して行う場面である。その際、児童Kのみではうまくアドバイスを行うことができなかった。しかしながら、教師が質問や補足をする、友達の運動を見て、伝えたいと思っていた内容に触れながら具体的にペアの児童の課題点と改善策について説明ができた。このことによって、児童K自身が友達の動きを見ることとアドバイスをすることの重要性について気づいているのではないかと考えられる。

c. 児童Fが友達の運動を見たことによって、自身も運動をしたいと考えた場面

人物	行動・発言 (10時20分頃)
F	児童Fがペアに対してアドバイスを言う。「リズムが一定になってよかったです。自分も次リズムを意識する」
ペア	Fのアドバイスに対して、お礼を言う。「ありがとう」
F	次に自身の動きを見とくように願う。「見といてね」

児童Fは、運動技能は高くない。また、苦手な練習を避けてしまうこともある。その一方で、アドバイスをしたり、仲間を励ましたりするといった前向きな一面もある。

児童Fがペアの児童に対してアドバイスをを行った場面である。児童Fは、ペアの児童の小型ハードルを走るリズムが一定であることについて気づいた。そのことを指摘して、次は自身もその点を意識しながら練習をしたいと考えるようになった。このことから友達の動きを見ることによって、自身のポイントの整理や運動を行う上での理想の姿をもてるようになることが明らかになった。また、生涯スポーツの基盤を形成する

上で大切な運動を「見る」「支える」の経験を重視することで、理想の動きに触れることができ、自身も運動をしたいという思いが強くなったのではないかと考えた。

以上の授業記録の分析から、運動を「する」「見る」「支える」学習を通してこれまで以上に運動への興味関心が高まったことが明らかになった。

4 成果と課題 (成果○・課題●)

- 本時の運動を「する」「見る」「支える」学習を通して、自分自身が挑戦したり、動きを工夫したりしてみたいと思うことが明らかになった。
- 運動を「する」「見る」「支える」経験を通して、他者をリスペクトする姿勢や大切にしようとする態度が形成されていくことが明らかになった。
- 役割として友達の運動を見たり支えたりすることによって、児童が主体的に運動を見たり、支えたりする様子が見られる機会が増えることが明らかになった。
- 運動を「見る」「支える」視点に気付かせる上で、友達の運動を応援したり、場の安全を工夫したりすることも想定していたが、「見る」「支える」視点が運動技能の向上のためのものにとどまってしまったこと。
- 授業の中で、運動を「見る」「支える」ことの重要性については理解させることはできたが、具体的にどのようにして運動を見たり支えたりすればよいか具体的な手段をもてていない児童が見られた。

主な引用・参考文献

- 木谷晋平, 日下裕弘 2018 『豊かなスポーツライフを実現する保健体育授業の創造「教養」を高める「する、みる、支える、知る、伝える」かわりのある授業実践』
- 小林大輔 2018 『「する・みる・支える・知る」楽しみ方を共有することができるマット運動の指導の工夫-互いの違いから学び合う協働学習を通して-』
- 松岡重信, 李捷 1997 『わが国における生涯スポーツ概念の実情と学校体育と関連について』
- 文部科学省 2017 『学校学習指導要領体育編』
- 文部科学省 スポーツ庁 2018 『全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果』
- 坂田祐也 2019 『「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わう子供を育てる体育科学習指導一歩・跳の運動における「伸ばし合い活動」の工夫を通して-』
- 須賀由紀子 2012 『生涯スポーツと体育科教育～保育・初等教育教員養成への視点～』
- 中央教育審議会 2011 『スポーツ基本計画の策定について』